



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3/TEL 045-774-9861洋光台
バプテスト教会内(蛭川明男牧師) / ●世話人代表 金子 敬
●事務局長 吉高 叶(栗ヶ沢バプテスト教会TEL 047-341-9459)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

巻頭言

荒川美智代

あらかわみちよ

撫順の奇跡を受け継ぐ会

ルワンダと撫順の「奇跡」

佐々木さんを支える会の皆さま、はじめまして。私は『撫順の奇蹟を受け継ぐ会』という市民活動をしています。「撫順」は中国遼寧省、東北地方の一都市です。ウブムエ10号で佐々木さんが紹介されていますが、1950年から約6年間に亘って、撫順戦犯管理所で起きたことを後世に伝えていくための活動です。佐々木さんと出会えたのもこの活動をしていたからなのですが、運命というか宿命といか、私にとって佐々木さんとの出会いはとても大きなものでした。

戦後シベリアに抑留された日本兵たちが強制労働をさせられていたことはご存知のとおりです。シベリアでは、65万人が抑留された中で6万人が亡くなり、その他は苦勞のすえ抑留後に日本へ帰国することができました。しかし帰国できない日本人がいました。およそ千人だけが、1950年に撫順戦犯管理所へ戦犯として移管されたのです。1949年に新中国ができた翌年のことでした。

意外なことに、この戦犯たちは戦犯管理所で人道的な待遇を受け、自分の罪を見つめ反省するに至りました。これを

『認罪』と呼んでいます。そして6年後、瀋陽軍事裁判が行われます。撫順と太原戦犯管理所の戦犯と一緒に裁かれました。結果、有期刑になったのは特に罪の重い45名、その他全員は不起訴、即釈放となり、死刑は1人もいませんでした。戦犯たちは帰国後、『中国帰還者連絡会(※略称中帰連)』という組織を結成し、反戦平和・日中友好のために活動してきました。高齢のため組織維持が難しくなり、2002年、若者を中心とした『撫順の奇蹟を受け継ぐ会』を結成、私は2005年に同会へ入会しました。

日中戦争時、日本兵は「鬼」となってしまうました。その「鬼」たちが変わったのは、戦犯管理所の職員たちの態度だったのです。いつも優しく丁寧に接し、決して怒鳴ったり殴ったりしませんでした。しかしその職員たちは、かつて日本に侵略されたときの被害者なのです。家族を殺された、自分自身が傷つけられた、そんな人たちばかりでした。日本人に仕返しができると思って職員を希望した人もいたといいます。しかし、政府から「決してののしったり殴ったりしてはい

けない、人道的な待遇を」という命令が出されていました。目の前に憎い日本人がいても仕返しできず悔し泣きする職員や、辞めたいという職員もいました。当然だと思います。自分の家族を殺した相手に優しくするなんてできるだろうか、と今でも信じられない思いです。「鬼」となってしまった加害者を、被害者が「人間」に戻したこと、そのことが『奇蹟』と呼ばれているのだと思います。

2008年、友人の紹介で佐々木さんと出会い、ルワンダで実践されていることを知りました。目からウロコでした。同じコミュニティの中で、「被害者」と「加害者」が生きていかなければならない現実。そのような中で『和解への道』『共存』という、誰がみても難しいと思わざるを得ない事業をされているわけです。佐々木さんは次のように語られています。「もし、あの時、あそこに自分がいたら?」「殺してしまったかもしれない自分がそこに居、殺されてしまったかもしれない自分がそこに居ます。」私も中帰連を知ったとき、まったく同じこと

を考えました。私が当時兵士だったら殺さないということができたでしょうか、と。私は被害者の傷を回復させるためには、加害者の真の謝罪が大事だと考えています。ですからジェノサイドに関与した当事者たちへの支援が必要になります。「加害者」が自分の行動、罪に向き合うようになるには人の助けが要ります。ルワンダでは佐々木さんたちのNGOが、「償いのプロジェクト」を通して積極的にそれを実践しています。私は戦犯管理所でおきたことを『奇蹟』と思っていましたが、それがまさか現代で取り組まれているとは思いませんでした。もちろん戦犯管理所でおきたことと、ルワンダのことは同じではありません。しかし根底は一緒だと思うのです。「被害者」と「加害者」は和解できるのか。これは私の中の大きな課題です。まさにそれを佐々木さんはルワンダで実践されているのであり、地に足のついた活動をされているということに衝撃と感銘を受けています。

佐々木和之

ささきかずゆき

支えられて、この「使命」に。

支援に連なってくださっている皆さまの温かい思いと熱い祈りを感じ、これから3年間、第3期の動きを進めていくために必要な力をいただきました！

■バンコク空港より

このウブムエが発行され、皆さまのお手元に届くころには、もうクリスマスが間近に迫っていることと思います。一足先に、クリスマスおめでとうございます。

私、恵、仁、共喜の4名は、ルワンダで7回目のクリスマスを迎えようとしています。今年も温かいクリスマスがこの国の友人たちと過ごすことになるでしょう。

実は今、私はバンコクの空港でこの原稿を書いています。昨日(11月30日)、約5週間半の活動報告を終えて成田から帰路に着き、本当ならあと数時間でキガリに到着しているはずでした。ところが、バンコク発ナイロビ行のケニア航空機が14時間ほど遅れるらしく、バンコク空港で既に16時間足止めをくってしまいました。今後、それなりにスムーズに事が進んでも、おそらくキガリ到着までに成田

出発から40時間以上を要することになりそうです。まだ出発予定時間まで5時間半ありますが、空港のタイ料理レストランで好物のパパイヤサラダでも食べ、元気をつけてから飛行機に乗り込みます！

■第2期活動報告の恵み

昨日までの5週間半、とてもハードな日程でしたが、日本での報告会を無事完了することができました。訪れた場所は北は東北から南は九州まで1都11県（岩手、宮城、福島、埼玉、東京、神奈川、静岡、岐阜、滋賀、京都、広島、福岡）、報告・講演・講話をさせていただいた教会や学校・大学等の数は30箇所、講演・講話回数も32回に上りました。寒さがそれほど厳しくなかったことも幸いし、体調を崩すことなく2年ぶりの「全国巡業」を乗り切ることができました。小型スーツケースを転がしながらの移動続きの毎日でしたので（よく歩きました！）、最後の1週間半はさすがに披露が蓄積して大変でした（歳を取ったということでしょうか？）。



●平尾教会での報告会の前に
おいしい鯛鍋をごちそうに！●

それぞれの場所で、支援会に連なってくださっている皆さまの温かい思いと熱い祈りを感じ、これから3年間、第3期の働きを進めていくために必要な力をいただきました。

支援者の中には、私が『ウブムエ』や『世の光』等で紹介してきた人々の名前まで憶えていてくださる方々が多数おら

れます。ルワンダと日本、「空間的な距離」を縮めることは困難です（飛行機が遅れば、到着にまるまる2日かかってしまいますし．．．）。しかし、祈りと思いによって「関係的な距離」を縮めることは可能であることに励まされています。今後は、支援会が企画するルワンダツアー等を通して、さらにルワンダの人々と顔の見える関係、励まし合い・祈り合う関係を作っていきたいと願っています。

今回は、ピアス(Protestant Institute of Arts and Social Sciences)でのルワンダ初の平和・紛争研究学科の創設に向けての働きが始まったこともあり、これまでも親しくお交わりいただいていた西南学院大と関東学院大に加え、平和・紛争研究やアフリカ研究に取り組む複数の大学にも訪問し、研究者や学生の方々と交流を深めることができました。特に、国際基督教大(ICU)、立命館大、京都大、龍谷大、広島大、広島市立大、日本平和学会（広島修道大で開催）にて、講演・講義、研究発表、懇談等の機会が与えられたことに感謝いたします。西南学院大、ICU、立命館大や「ルワンダの学校を支援する会」というNPOで持たせていただいた講演会、そして、11月26日に開催された支援会主催の報告会には、他大学からの学生さんたちも多数参加されました。ルワンダ、和解、修復的正義などに関心を持つ日本の若者たちが、過去6年間に確実に増えていることを実感しました。

■関東学院小学校との交流

11月21日、横浜の関東学院小学校を2年ぶりに訪問しました。2005年6月、ルワンダで活動を始める前のことですが、関東学院小学校を訪問した時に、「ルワンダのことを学んでください。学んだことを周りの人たちに伝えてください。そして、ルワンダの人々のために祈ってください。」とのお願いをさせていただき

ました。それ以来、「アマホロ」という校内新聞の発行、「ルワンダ展」の開催、月ごとにお伝えする「祈りのリクエスト」を覚えてのお祈りなどの活動を、これまで6年以上にわたって継続してくださっています（詳細は関東学院小のホームページhttp://es.kanto-gakuin.ac.jp/esactivity_03.html を参照）。

また、保護者の方々のご協力もいただきながら、私の現地での活動のための支援金を継続的にお送りくださってきたばかりか、ピース・インターナショナル・スクールの子どもたちのために、学校用のデスク、算数セット、ピアノカを多数送っていただきました。

今回の訪問では、全校礼拝でのお話した後、高学年の子どもたちには「和解」について、低学年の子どもたちには、ルワンダとリーチの活動の全般的なことについてお話しをさせていただきました。子どもたちが書いた感想文を読ませていただき、私のメッセージをしっかり受け留めてくれたことがよく分かり、感激しました。以下、6年生が書いた感想文の中から抜粋してご紹介します。

* 私もよく友達関係がうまくいかない時があります。でも、佐々木先生から教えてもらったように、話し合ったり、自分の気持ちを相手に伝えることで和解ができていくことを知りました。なので、また友達関係がうまくいかなかったら、教えてもらったことを思い出して、和解していきたいです。まだうまくいかないかもしれないけれど、今の気持ちなどを相手に伝えて、早く解決したいと思いました。今日、こうして佐々木先生にいっぱい教えてもらってよかったです。私はメモ帳に10ページもメモっちゃいました！

（Zさん）

* ぼくは、佐々木先生の「和解」の講演を聞いて納得した。やはり、被害者へのサポートだけでなく、加害者へのサポートも大切だと思った。（Kくん）

* 今日の講演で、自分は「傷つけられて

いる人の気持ちになって考える」という言葉が最も印象に残った。その理由は、自分も加害者側でそういう経験があるからだ。長年、佐々木先生はそういうことを考えてきて、こういう結論にたどり着いたことにとっても感心したし、勉強になった。（Nくん）

* 「お前が悪い、とは言わずに、私は・・・と言った方がいい」と聞き、そうだなあと思いました。佐々木先生は悲しい話をたくさん聞かなければならないので、大変だなあと思いました。（Kさん）

* 争いで傷ついた人は、他人に傷つけられた人だけでなく、他人に傷をつけてしまった人でもあることを知った。その事を知って、傷つく人は、連鎖して増えていくと思った。傷ついた人は、自分を守るために相手を傷つけてしまうからだ。たとえ傷つけられても、やりかえさずに、相手を「許す」事の大切さを知ることができた。その事を実行したルワンダの人々はえらいと思った。（Sさん）

* 特に印象に残ったことは、3月11日、日本の東日本大震災の時、ルワンダの人たちは私たちの知らないところで一緒に悲しんでくれたり、祈ってくれたり、励ましの歌を作ってくれたりしたことです。私は、今回、このような話を聞けてうれしかったです。ルワンダが大好きになりました。（Nさん）



●関東学院小学校での講演●

関東学院の皆さん、今度は皆さんの代表（先生方や保護者の方々）がルワンダを訪問できるといいですね。これからもお祈りのご支援をよろしく願いいたします。

■被災地を訪ねて

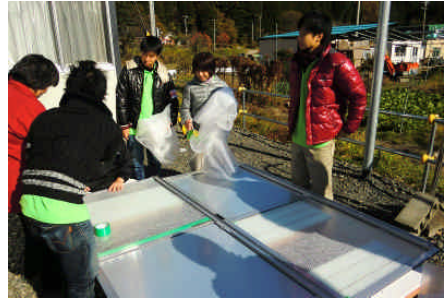
11月14日から18日の5日間、祈り憶えていた東北大震災と福島第一原発事故の被災地訪問を果たすことができました。訪問した主な被災地は、岩手県の釜石市と大槌町、宮城県の仙台市、名取市、亶理町、そして、福島県の南相馬市でした。どの被災地でも、津波の破壊力のすさまじさに言葉を失いました。そして、愛する家族だけでなく、その家族との繋がりを確認させてくれるはずの一切のもの・場所を奪われてしまった方々のお気持はいかばかりかと考えました。しかし、私にそれを想像することが極めて困難であることを感じずにはおれませんでした。



●全てが押し流された仙台市沿岸部●

被災地滞在第1日目、三陸沿岸部にある吉里吉里のグループホームに入居されている被災者の方々（女性の高齢者）を、西南学院大学の学生ボランティアチームと一緒に訪ねました。金子千嘉世さん（バプテスト連盟災害対策委員）から事前に指導を受けた学生たちは、にわか仕込みの手もみ・肩もみサービスをしながら、被災者の方々と言葉を交わしました。1時間にも満たない交流を終え、次の訪問地である大槌第四仮設に向かうことになりました。すると、孫かひ孫の年齢にあたる若者たちと言葉を交わす中で、心の中に仕舞い込んでいた様々な思いが込み上げたのでしょうか、それまでにこやかに学生たちと言葉を交わされていた数名のおばあちゃんたちが、堰を切ったように涙を流しながら「来てくれてありがとう」、「行かないで欲しい」と言って

別れを惜しまれたのでした。また、大槌の仮設でも、同様な交流が続く中で、少しずつ、ご自身の被災体験を語り始める方々がおられました。



●結露防止対策のボランティアに参加●

清水康之さん（自殺対策支援センターライフリンク代表）が、「家族を亡くした遺族のために」という論考（岩波新書、内橋克人編『大震災のなかで—私たちは何をすべきか』所収）の中で、被災者の「人間的な痛みからの回復」を復興スキームの柱に据えること、そして、そのために「自らの体験と安心して向き合える環境」の整備を訴えておられます。私も今回の被災地訪問中、そのことの大切さをひしひしと感じました。実は、大虐殺後を生きるルワンダの人々の「癒しと和解」のミニストリーが向き合う中心的な課題の一つが、「人間的な痛みからの回復」、すなわち、「大切な人が亡くなった現実（喪失体験）を自分の人生の一部として受容し、その上で、故人との新たな関係性の中で、その人らしい人生を歩んでいけるようになる」（清水康之）ことに他なりません。短期間の被災地滞在でしたが、3. 11後の日本と大虐殺後のルワンダにとっての共通の課題について考えさせられる時ともなったことを感謝しています。金子千嘉世さん、佐藤浩さん、小河義伸さん、金丸真さん、鈴木牧人さん、お忙しい中、被災地をご案内くださりありがとうございました。

ルワンダの友人たちも、震災と原発事故の被災者の方々のことを覚えて祈ってくださいています。震災発生6か月後

の9月11日には、福島在住17年になるルワンダ人、カンベンバ・マリールイズさんの呼びかけで、『ルワンダー日本連帯デー』が首都キガリで開かれ、ルワンダ人と日本人を合わせると300名近い人々が集い、犠牲者の追悼と被災地の復興のために祈りました。私たちは、これからも、日本の被災地の方々のことを覚えて祈り続けます。



●「ルワンダー日本連帯デー」●

■新しい年に向かって

今年も残すところあと1ヶ月ですが、年末まで忙しい日々が続きます。リーチは新しい地域での「償いのプロジェクト」を開始すべく、11月25日、首都キガリの南方にあるブゲセラ郡で虐殺加害者50名を対象に、第一回目の学習会を実施しました。第2回目以降は、私も学習会の企画・実施に関わっていきます。償いにむけてのアクションが起きるかどうかは、元受刑者たちが学習会で受けたチャレンジにどのように応答するかにかかっているのですが、「償いのプロジェクト」が広がっていく第一歩になるように、祈りつつ進めていきたいと思えます。

また、過去4年間、「償いのプロジェクト」を続けてきたキレヘ郡では、被害者と加害者の枠組みを超え、貧困削減という共通の課題に取り組みながら関係を強めていくことを目指して、協働プロジェクトの立ち上げに着手します。

12月6日からは、ピアスの開発学部所属する2年生約80名を対象に、「平和・紛争研究概論」の講義を始めます。ピ

アスで働き始めて11ヶ月になりますが、平和学に直接関係する科目の授業をするのは初めての事です。学生たちの反応が今から楽しみです。新年からは、開発学部の3年生を対象に、いよいよ平和・紛争研究専攻コースがスタートするため、これからその準備を加速していきます。年末年始（12月27日～1月3日）には、バプテスト連盟のミッション・スタディーツアーの参加者12名がルワンダに滞在されます。リーチやピアス、そして、ピース・インターナショナル・スクールの関係者との交流や活動視察など、盛りだくさんのプログラムになりますが、それぞれの参加者にとって、きっと忘れられない年末年始になることでしょう。

来年は、8月末から9月初めにかけて、支援会主催のスタディーツアーを開催する予定です。間もなく正式な案内を送らせていただくことになると思いますので、ご興味のある方、ぜひルワンダでお会いしましょう。

今年一年、お祈りとご支援をありがとうございました。新年には、これまでの活動が更に深まり、広がっていくことを期待しています。続けてご支援をよろしく願いいたします。最後になりましたが、新しい年の皆さまの歩みの上に、神様からの豊かな祝福がありますように、お祈りいたします。



●ピアスの学生たちと●

夢がふくらむ ピース・インターナショナル・スクール

佐々木 恵
ささきめぐみ

何もなかったところから、子どもたちの
笑顔と未来が生まれています。皆さまから
届けられる祈りの贈り物によって。

■里親制度による教育支援が始まります

私たちがルワンダに来たところからかわり続けてきた、ピース・インターナショナル・スクール（以降PIS）が日本国際飢餓対策機構の里親制度による支援を受けることになりました。すでに手続きも整い、里親になってくださる方が決まり次第、順次、支援が始まることになっています。目標は、120人。里親の決まった生徒は学費が無償になり、またPISを通して、地域社会に対する平和教育や貧困削減プログラムが実施されることになっています。

■二つのPIS

ここで、PISの概要をあらためて紹介いたします。私たちの友人デニス・ムガボさんが1995年、キガリ市内のストリートチルドレンを対象にはじめた絵画教室がこの学校の前進です。2002年には、ルワンダの貧しい区域に住む子どもたちや、コンゴやブルンジからの難民の子どもたちが共に学ぶ学校として、PISが新たなスタートを切りました。丘の斜面にあるデニスさんの自宅を改造・増築した学校です。デニスさんはカナダに出稼ぎに行きつつ運営費を捻出しながら、学費の払えない多くの生徒をこの学校に受け入れてきたのです。ところが、2009年、首都キガリの都市開発により、PISのある地区が立ち退き対象地区になったのです。移転先が与えられることを祈っていたところ、デニスさんが長年親しくしている日

本人の友人から支援の申し出があり、キガリから車で南に約1時間の距離にあるニャンザに土地を購入することができました。さらに2010年、日本大使館の「草の根・人間の安全保障無償資金」により、新校舎が建てられたのです。（詳しくは、ウブムエ15号・16号をご参照ください。）今年2011年1月には、ニャンザ・ピース・アカデミー（以下、ニャンザ校）として開校し現在34名の子どもたちが学んでいます。PISキガリ校の方は、学校の手前100メートルまで開発が進んでいますが、実際の立ち退きがいつになるのかわからないまま、今年も1月から新学期を迎えます。

■「日本人の学校」

私がPISにかかわり始めた5年前には、ニャンザに土地を買うことも、新しい校舎が建つことも、本当に夢のような話でした。いえ、経済的にこの学校を続けられるかどうかさえ心配していたほどでした。ところが、デニスさんは、いつも神様の計画を信じておられました。資金も何もないところから、土地が与えられ、校舎建設が叶い、そして今回の里親制度の実施へと、一つ一つが実現していったのです。その背景には、多くの方々の支援と祈りがあったことはいまでもありません。私たちがPISにかかわり始めたすぐのころから関東学院小学校は、ピアノや算数セットを送ってくださったり、デスクや黒板の購入費を負担してくださ

いました。今年も保護者会の方々が算数セット120箱を送ってくださったのでした。また、日本バプテスト女性連合も献金をささげ続けてくださっています。

デニスさんはいつも、PISのことを、「日本人の学校」だといいます。PISは、デニスさんの祈りと実践があつてこのように続けてこられたのはいうまでもありませんが、このように、日本人との豊かな交わり、そして祈りに支えられてきたのだと思います。デニスさんは今、キガリのPISの子どもたちもニャンザ校で学べるようにと、寄宿舎の建設の新たな夢を語っておられます。

■ニャンザ校に図書室を！

私はこの5年、隔週の土曜日に「折り紙教室」として、日本語の歌や指遊び、折り紙を教えながらこの学校に関わってきました。去年からは、この教室で絵本の読み聞かせもはじめるようになりました。絵本に触れるチャンスのほとんどない子どもたちは、この絵本の時間を一番楽しみにしています。その子どもたちの輝く目に出会って、「ニャンザ校に図書室を実現したい」とのヴィジョンが与えられ、今、日本の教会や、友人知人に呼びかけて英語の絵本を送ってもらう運動を進めています。すでに第一便として、日本の常盤台教会から英語の本1箱が届

けられました！（支援会のホームページを参照ください。）また、イギリスにいる友人は教会で呼びかけて、三つの段ボール箱いっぱいの絵本を集めてくれ、今その本がイギリスを旅立とうとしています。そして洋光台教会からも、ルワンダに向けて船出しようとしている絵本があるのです。また、デニスさんの友人のイギリス人青年は、約500冊の本を送ってくれることになっています。図書室の実現がもう間近に迫っています！



●ニャンザ校舎開校式でのパフォーマンス●



●日本から送られてきた英語の絵本を手に●

「佐々木さんを支援する会」事務局から

- クリスマスおめでとうございます。ウブムエ19号をお届けいたします。
- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。
- また、下記の口座を、常時ご利用いただけます。

郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会

- ホームページを是非ご覧下さい。佐々木さん、恵さんの報告の中で引用されているウブムエのこれまでのバックナンバーをご覧いただけます。 <http://rwanda-wakai.net/>
- 皆さまの上に、豊かなクリスマスと、年末年始の訪れをお祈りいたします。 世話人会一同

-
- 世話人会 金子 敬（古賀教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、村上千代（日本バプテスト女性連合幹事）、吉高 叶（栗ヶ沢教会牧師）